「ノコギリヤネ・トライアングル」

（ 断章“ノコギリヤネのある風景” その 11 ）

▲　のこぎり二のションヘル機

昨年の 11 月、尾西線玉ノ井駅に隣接するノコギリヤネで催された「ノコギリ・スケルトン・トライアル」からほぼ５ヶ月が経過した。当日、「ノコギリアン・ガッカイ 2021」の展示会場である尾西歴史民俗資料館から、玉ノ井に向かい、終了後にのこぎり二のノコギリアン・コウバに戻った。その軌跡は、きれいな三角形を描いていた。

のこぎり二のある篭屋を起点に、起、玉ノ井地区を結ぶ「ノコギリヤネ・トライアングル」が浮かび上がる。

のこぎり二において、大きな存在感を有する二台のションヘル機。これは、三年前、起の升善毛織さんが廃業された際、織機を玉ノ井の葛利毛織さんが引き取り、それをのこぎり二に設置したまま、自社の機械の代替部品として活用しているものである。奇しくも、廃業、現役、再活用という三態のノコギリヤネが連携している。

この地域は、濃尾平野を乱流していた木曽川が生んだ農村地帯であるとともに、古くから農間仕事の織物が盛んな機業地でもある。後年、わが国の都市計画の父と称された石川栄耀は、大正末期、内務省都市計画技師として名古屋に赴任し、この地を「工村」となぞらえた。現在、かつての勢いは失われたが、いまや尾州織物の未来を担う救世主的存在となったションヘル機とともに、いまも数多く残るノコギリヤネは、農村から機業地へと展開した共同体から生まれたものである。篭屋、起、玉ノ井の三つの地区が織りなす「ノコギリヤネ・トライアングル」から見えてきたものとは…

ノコギリアン（神奈川県藤沢市在住／のこぎり二にノコギリアン・コウバを開設）

１．ノコギリヤネの原風景／工村あるいは機業コミュニティ

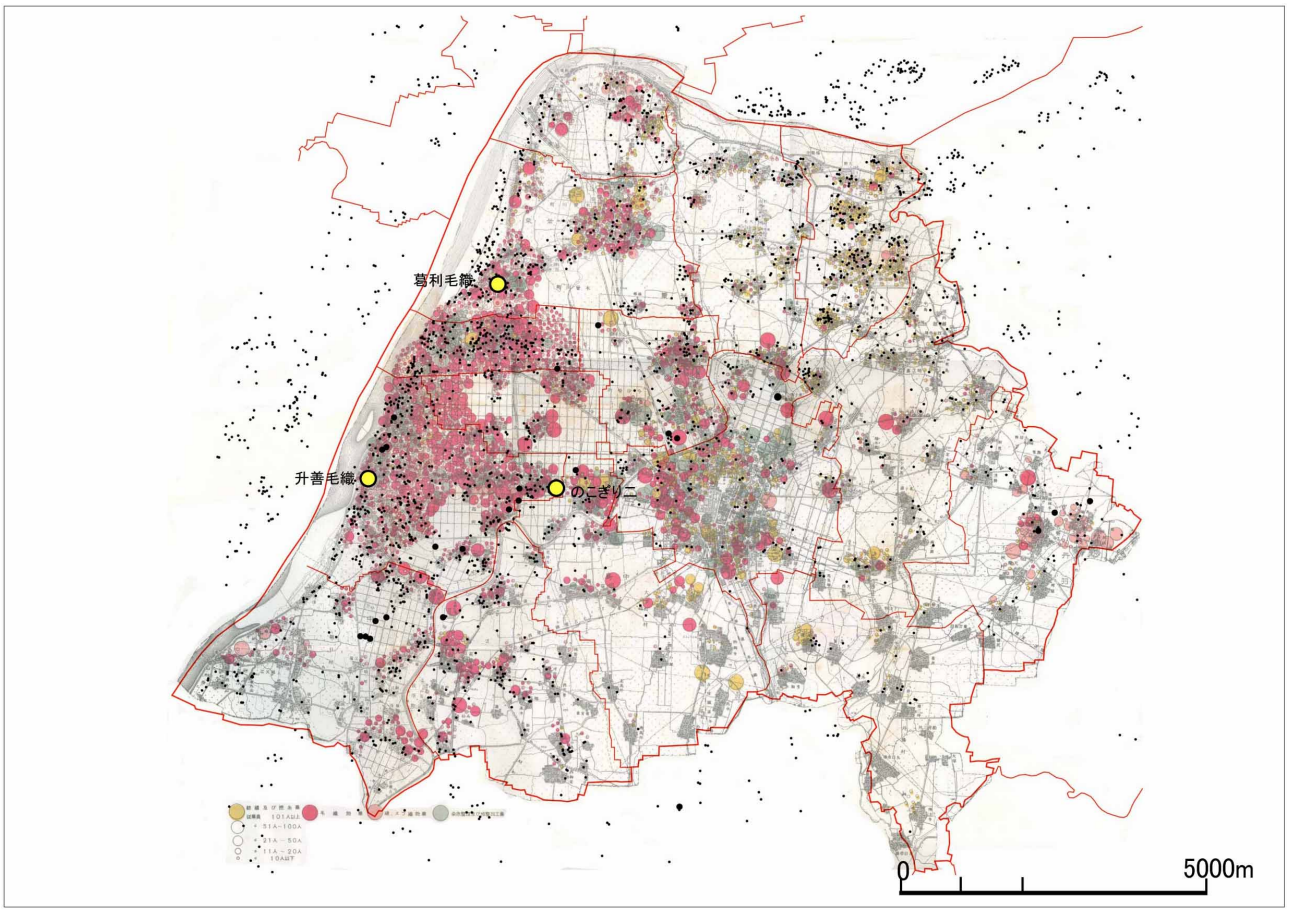
玉ノ井の葛利毛織、起の升善毛織、のこぎり二の平松毛織の創業は大正時代にさかのぼる。第一次世界大戦（1914～1918）で毛織物の輸入が途絶え、この地域では広幅織機の国産化に成功し、毛織物生産地として飛躍した。ションヘル機の台頭が大きい。そして太平洋戦争を挟み、戦後のガチャマン景気を迎える。

その後、平松毛織は 20 年前に廃業し、ノコギリヤネの風景としてシンボル的存在であった升善毛織も 2018 年の台風被害で、機業からの撤退、建物の解体を余儀なくされた。

織物の生業地は全国数多いが、大正期の都市計画家が「工村」と呼んだこの地域は、農村共同体において培われた工芸的風土を背景に、綿、綿絹交織、毛織へと多くのイノベーションを起こしてきた「機業コミュニティ」を形成した（「ノコギリヤネのある風景・その５」）。

ノコギリヤネは、農村共同体に貨幣が浸透した交換経済の象徴的存在かもしれない。要するに「ゼニになる」。一方でそれは、農村共同体の崩壊を促すものだったかもしれない。

特段のつながりのなかった三つのノコギリヤネから生まれた「ノコギリヤネ・トライアングル」とは、何だったのか。ションヘル機の製造が終了した現在、廃業者から現役業者への織機の移動は珍しいことではない。しかし、ここに第三者が加わり、事態が変化した。「贈与」である。いや、贈与というより、「ゼニにならないこと」と言った方がわかりやすそうだ。ノコギリヤネとともに共同体が消滅していく中、三つのノコギリヤネの間に生まれた「共同的な関係」に注目したいと思う。



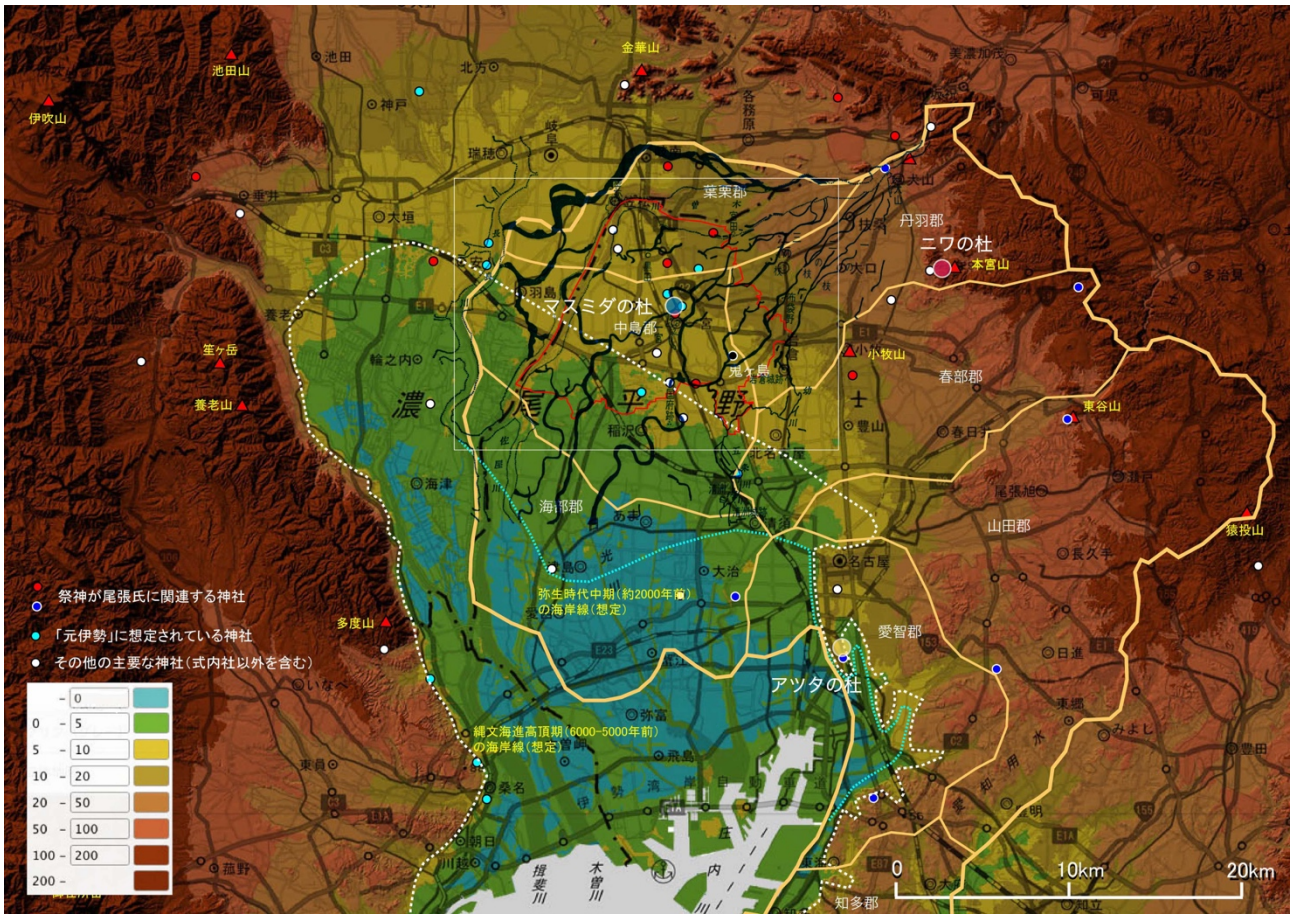
▲ 昭和 30 年代の織物工場と現在のノコギリヤネ分布

２．「オワリ」という“生命共同体”の誕生

「オマエたちの生命は木曽八龍(流)のギフトだ」とマスミダカラスは言った。ギフトとは贈与のことだ（「ノコギリヤネのある風景・その７」）。かつて、木曽八龍が尾張の大地に流れ込む大元を治めていたのはニワの国であった（同・その９）。マスミダカラス、教えてくれ。木曽八龍がもたらしたオワリの国のことを。

オレを呼んだか。…そうか。オワリの始まりを教えてやろう。
オマエたちの祖先は、稲作という文明を携え西からやってきた海の民だった。九州に渡り、瀬戸内を通り、紀伊半島を越え、伊勢の海に入ると、いくつもの集団に分かれて木曽八龍を遡上していった。オレたちが、上空から農耕に適した土地を見つける。そして、上流部の大地に上陸し、定住し、先住民と融合していった。弥生人の誕生だ。各地に部族が生まれ、氏族を構成し、西方の大陸やヤマトから入ってきた高度な土木技術をもとに、下流部を開拓し、カミを祀り、杜を造り、低地一帯に広がっていった。

平野部に広がる多くの氏族を取り込んでいったのがオワリ氏だ。彼らは、伊勢の海に突き出た高台を見つけて真っ先に上陸した集団で、その後、海岸部の南部一帯をまとめ、航海術を活かして、河川による流通を支配して強大になっていった。東部で権勢を誇ったニワ氏は、もともとは山の民だ。最後にオワリ氏と合体して、オワリという国が誕生した。木曽八龍がもたらした大地のもとに大きな共同体が構成された。オマエたちや多くの生命が生まれてきた生命共同体だ。河川がつなぐ山と海の出会うところに、オレのマスミダの杜がある。



▲ 木曽八龍のギフト／オワリという共同体

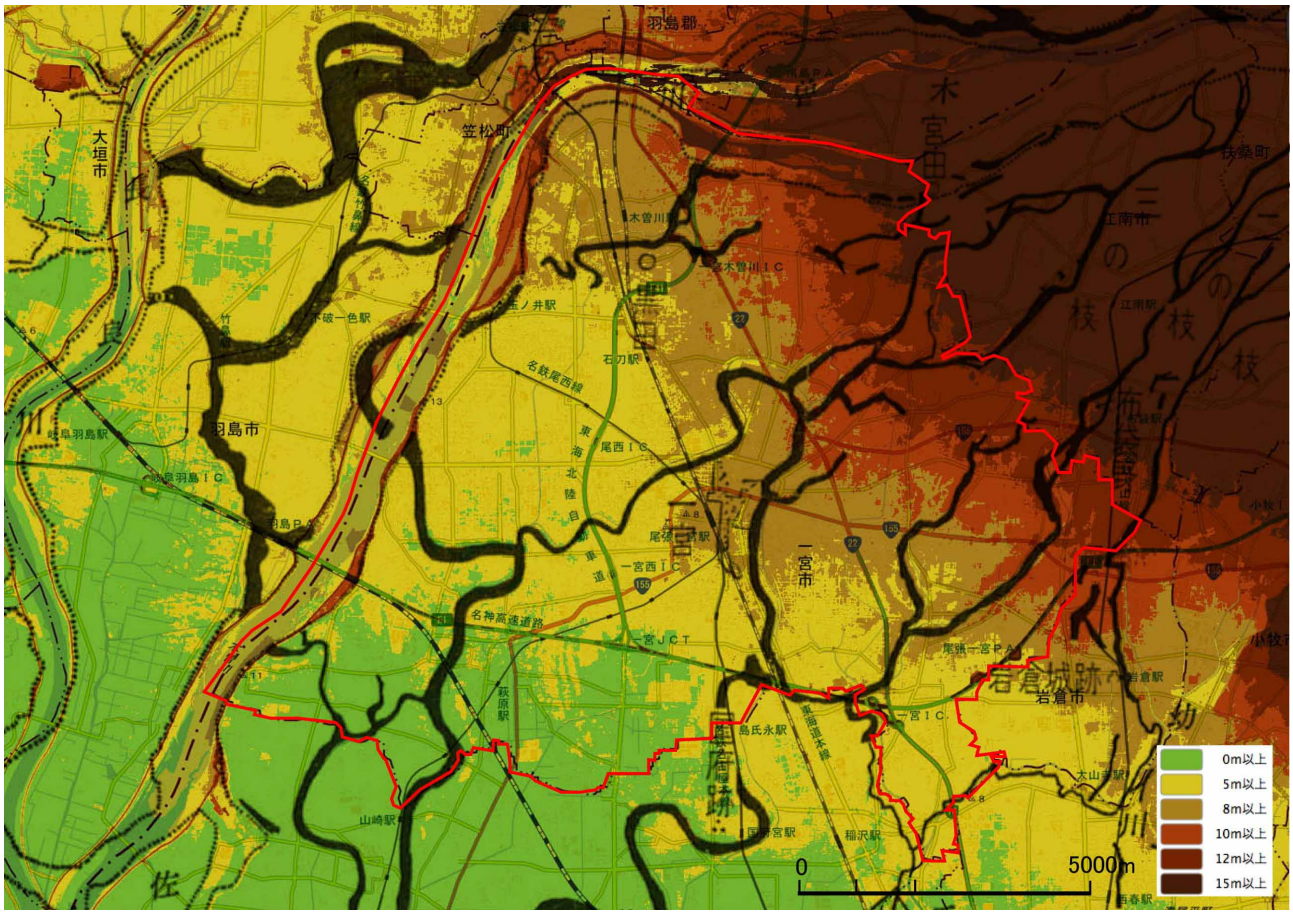
３．共同体のギフト

マスミダカラスは続けた。

共同体とは、運命を共にするものだ。彼らの持ち込んだ稲作農耕は一人ではできない。共同が不可欠だった。個々の生命とその土地が一体となって共同体になる。個では生きていけない。共同体からの逸脱は「死」を意味していた。
オマエたちの生命は、大地とともに生きてきた。オレたちもそうだ。オレの生命はマスミダの杜にある。小さなものだが、その自然、仲間たちと生命共同体を営んでいる。オマエたちにはイチノミヤカラスと揶揄されながら、夜には集団で寝ぐらを構える。そうすると、大きな生命体の一部であることを実感する。

大きな生命体を構成しているのか。「ふるさと」というのは、そういうものかもしれないな。木曽川がもともとは、一つの大きな流れではなく、幾筋もの流れだったことに大きな意味がありそうだ。沿川の多様な文化が重なってこの地域ができた。そこには引け目と感じるものもあるかもしれない。時代や状況によって様々なカタチとなったのだろう。技術を後世に伝えた勤勉実直性もあれば、ガチャ万に見られるお金への執着性もある。それらを含めて、木曽八龍によるギフトかもしれない。ギフトは不合理なものももたらすのかもしれない。

人間は共同体を捨てようとしているが、多様な生命体が共存している時の共同体は、最も創造性を発揮するカタチかもしれないぞ。オワリの始まりの時のように。



▲ 山と海の出会うところ

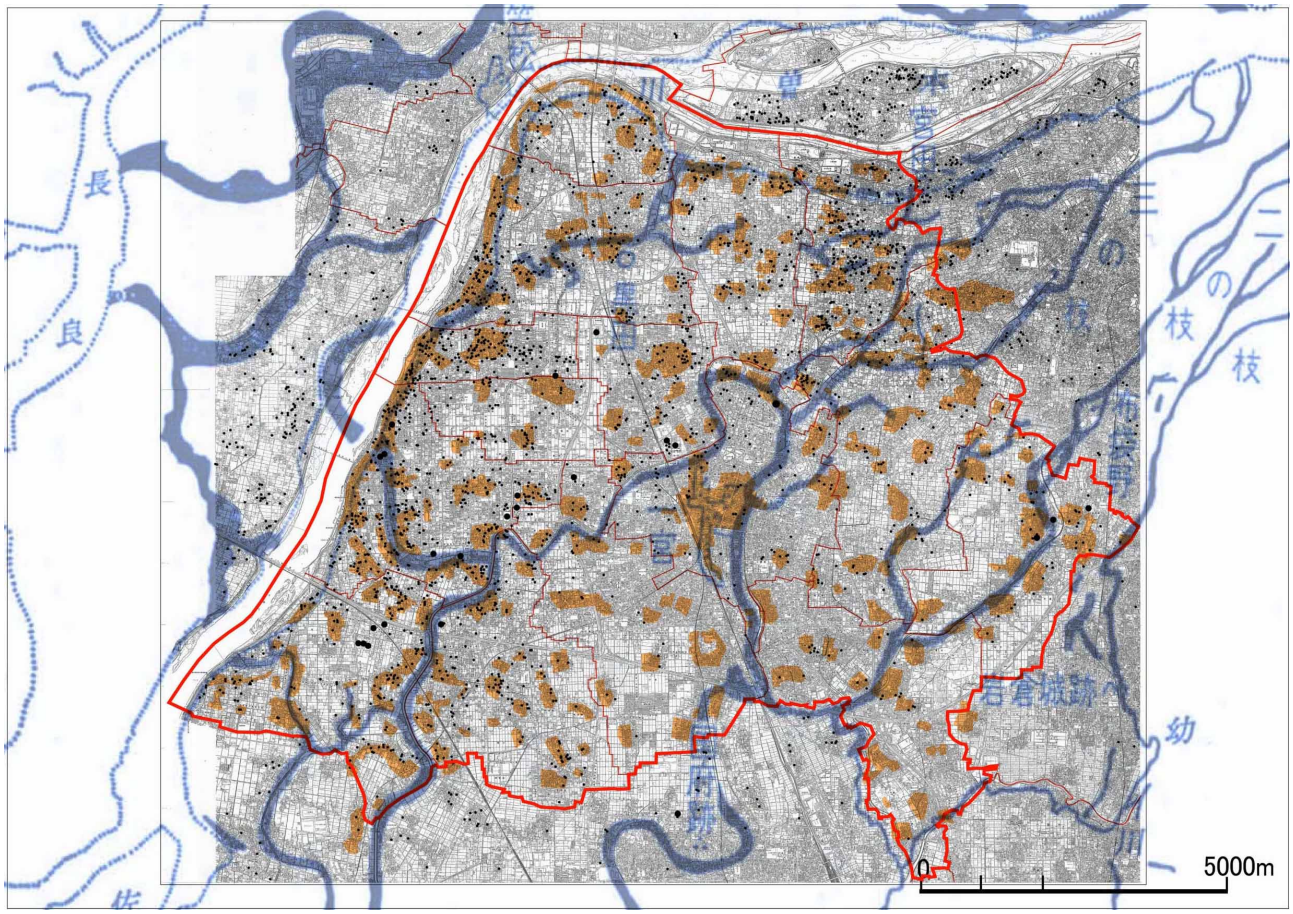
４．ノコギリヤネに受け継がれる“生命共同体”

われわれ人間は、もはや共同体ではなく「個」のセカイで生きていかざるを得ないのだろう。しかし、オワリの大地は、木曽八龍の上に造られ、集落を築き、時間を重ねてきたのだ。ギフトはギフトを呼び込む。それが多様性をもたらす。そして生命を紡いでいく。

農村、いや工村から生まれたノコギリヤネには、木曽八龍の生命共同体から受け継ぐものがあるのかもしれない。のこぎり二には、多くの生命体が交錯する。その出会いによって未来の変わる縁起空間である。そして、「からっぽ（ウツホ）」であるノコギリヤネは、個々の生命体の「身体」として、創造的活動を導いていくのではないだろうか。

オレたちがなぜ黒いか、知っているか？それは、オレたちがオワリ共同体の DNA を引き継いでいることの証左でもある。昔、海の民を先導したオレたちの身体は「青」だった。東の丘陵に住む先住のニワカラスたちは土の「赤」だった。それが、いく世代も混じり合って、重なり合って「黒」になった。黒は融合の証だ。
でもな、青と赤だけじゃ足りない。オレたちの中に先陣を切る名誉を担うヤツがいた。イセの海に突き出た高台のアツタに導いた。ヤツには「黄金」の身体が与えられていた。
…信じたか？　カッ、カッ、カー。オマエはすぐに信じるから面白い。

そう言い残すと、マスミダカラスは飛び立った。太陽を背に大きく羽を広げたその身体は黒から青く変わり、そして一瞬だが、黄金色に輝いたように見えた。
「マスミダカラス、オマエが…」



▲ 100 年前の共同体（集落）と現在のノコギリヤネ

〇エピローグ：辺境あるいは隅の風景へ

熱田神宮を三宮として、なぜ真清田神社が一宮なのか。諸説あるようだが、西方から来た海の民の先導役として、オワリの礎を築いたマスミダカラスの栄誉を讃えるものだと考えると愉快ではないだろうか。この地域には、「ガチャ万の呪縛」を吹き飛ばしてくれる「ユーモア（神話)」が必要かもしれない。カラスが黒いのは、赤・青・黄の三原色によるものだったとは。

のこぎり二の名称は、工場の役目を終えた新たな生き方の意味があるという。それにならえば、現役工場は「のこぎり一」で、消滅したノコギリヤネは「のこぎり三」になるのかもしれない。ノコギリヤネ・トライアングルは、「のこぎり一・二・三」の寓話ということか。のこぎり二もやがて三になる。そして、のこぎり一の前には「のこぎり 0」がある。それは何か。
のこぎり二に置かれた二台のションヘル機は、順次、部品が外されて、姿を変えていく。身を削りながら生命を永らえる。この生命体が最後に残すものは何だろう。

のこぎり二は、国際芸術祭「あいち 2022」（7/30～10/10 ）の会場のひとつとなっている。オワリの辺境の地、ノコギリヤネという辺境の空間で開催される「あいち 2022」。このギフトはセカイに開かれている。私たちは何を受け取るだろう。
そして、贈与は、返さなければいけない。断ち切ってはいけない。

マスミダカラスのセカイと違って、人間という生物がつくる共同体は厄介である。それは、大きくなって国家に行き着く。そして、国家同士の衝突は悲惨な事態を余儀なくする。大地は荒らされ、多くの生命が失われる。
われわれが住むこの国は、最後の世界大戦以来、幸いにもその不幸を免れてきた。しかし、その過去を振り返れば、西方の大陸の覇権抗争から逃れてきた海の民と親和的と云われる縄文の先住民が融和してきたわれわれの祖先も例外ではなかった。
いくら文明が高度化しようと、カラスの知恵に及ばないのかもしれない。

俗世は　うつつの花に　酔いつつも　擬勢の平安を　ふと、かえりみる

2022.4.6（清明・玄鳥至／せいめい・げんちょう いたる）

▲「あいち 2022」の先行展示（遠藤薫氏による）